3　西蒲区大沢遺跡の縄文時代遺物

(1)　はじめに

平成28年度企画展『水辺に栄えた縄文社会』において、角田山麓に形成された前期終末～中期前葉遺跡群をとりあげた。日本海の「ランドマーク」角田山にちなんだ遺跡群の特異性に焦点をあてたものである。そのなかで中期前葉後半段階の中核的集落として大沢遺跡を紹介したが、展示遺物の一部に種々の理由で実測図が提示されていないものや未報告資料があった。本稿ではこれを示し、本遺跡に備わる特性を考える一助としたい。

(2)　大沢遺跡の概要

大沢遺跡は、越後平野の西縁を日本海に接して連なる山地帯の北端「角田山」の北東麓に位置する。遺跡は昭和20年代に上原甲子郎氏によって発見された〔上原1956〕。遺跡の実態については山林に覆われることから永らく不明であったが、1971年に行われた柿畑の造成に際し多量の遺物が出土したことからおおよその範囲が判明した。造成直後に行われた巻史学会の踏査によれば、遺物は「大沢」・「ワゴ谷」・「明後沢」に開析された二つの尾根上の東西450m・南北300mあまりに分布し、その状況から北部尾根高域部のＡ地区、南部尾根低域部のＢ地区、北部尾根低域部のＣ地区に区分された。

1979年～82年には、Ｂ地区東方の尾根先端部（Ｂ´地区）を中心とした発掘調査が新潟大学考古学研究室によって行われた。弥生時代後期の高地性集落の把握に主眼を置いた学術調査であったが、Ｂ地区に形成された縄文時代の捨場の一角にも小規模なトレンチを設定し、中期前葉から中葉の遺物が多数出土した〔新潟大学考古学研究室1981〕。1989年には、Ａ地区で計画される農道舗装工事に伴う小規模な発掘調査（100㎡）を巻町教育委員会が実施し、中期前葉土器群の編年や剥片石器の石材組成、生業復元などに関する良好な情報がえられた〔巻町教育委員会1990〕。大沢遺跡でこれまで行われた発掘調査は広大な遺跡のごく一部にすぎず、全体像は不明と言わざるをえないが、これまでえられた知見を総合すると、前期終末～中期中葉の遺構や包含層が良好に遺存しており、Ａ～Ｃ地区の捨場に対応する形で中規模集落が形成された可能性が高いことや、黒曜石の流通拠点としてＡ地区が機能したことが明らかになっている。

(3)　前期終末～中期中葉の土器と土製品

資料の記述に先だち、本遺跡で製作されたと考えられる土器および土製品における含有物の特徴を記しておく。角田山麓北東台地は、山腹から供給された土石流堆積層を基盤とし、その含有礫や開析谷の沢砂は安山岩・玄武岩などの角礫や破砕粒子が主体を占める。そのため、本遺跡で製作された土器や土製品は破砕岩石を何らかの形で含有する。これに加えて、搬入花崗岩を母材とした石英の破砕粒子を混和材として用いる個体が半数弱を占める点も特徴である。

前期終末の土器　１は1989年の発掘調査にあたり１号住居床面から出土した円筒下層ｄ式系土器で、本遺跡の成立段階にあたる主要資料の一つである。『巻町史』〔巻町1994〕324頁の土器観察表で２号住居出土と誤記されたためここに訂正するとともに、これまで提示しなかった拓影を示す。

中期前葉の土器　４は1989年調査に際し中期前葉４期の「捨場下層」から出土した。底径4.7㎝を測るミニチュア土器の下半部で、円形突起を伴う横位竹管平行沈線によって下半部文様帯と口縁下の無文帯に分けられる。竹管文の幅は４㎜で、この時期としては細身の工具を使用する。下半部文様帯には縦位集合沈線を施し、爪形連続刺突を加えた平行沈線を等間隔に配す。底面には中期前葉土器に稀な木葉痕（広葉樹）が観察できる。器壁内には微細な破砕石英を多量に含む。磨耗度の高いチャート粒子を伴うことから、搬入品の可能性が高い資料である。

５は1989年調査地に接した農道の法面から八木静江氏が1992年に採集した資料である。巻町教育委員会が寄贈をうけ、現在当センター所蔵品となっている。発掘調査時の層位と対比すれば、捨場上層（中期前葉５期）に包含されていたものとみられる。本例は外傾器形をなした深鉢の上半部文様帯から下半部縄文帯にかけての体部資料で、現存部最大径35.5㎝を測る比較的大形の土器である。器面には幅７㎜の竹管工具による平行沈線を２～３条一単位で施し、縦位沈線によって上半部を４分割、下半部を８分割する。下部沈線の上端には隆帯を伴う渦状文様を配す。多段に区画された上半部には、竹管工具の先端刺突と縦位沈線を複合させた「蓮華文」を無文帯を挟んで２段にわたって充填する。下半部に施す縄文は、横位回転による単節LRである。破砕石英とともに磨耗した岩石粒子を多く含むことから、搬入品とみられる。

３は柿畑造成時に巻史学会が採集した当センター所蔵品。出土地区は明らかでない。外反する深鉢の口縁部破片で、端部に二つの山形小突起を付す。幅９㎜の竹管平行沈線で横位に区画し、上段区画内に単節縄文LRと縦位沈線を施す。下段の無文帯以下には緩やかにカーブした隆帯を縦に貼付し、連続爪形文を加えている。泥岩とみられる軟質岩石の磨耗・破砕粒子を多量に含み、本

遺跡の中では異質な胎土である。

中期中葉の土器　2は口縁部が扇形をなした円筒上層ｃ式系土器。柿畑造成時に巻史学会が採集した当センター所蔵品である。採集地区は明らかでない。口縁部が外反し、著しく肥厚した端部が左上に残る。口端と器表に太さ５～６㎜の粘土紐を貼付し、幅４㎜台の刺突列を粘土紐に沿って施す。粗大な破砕石英や磨耗岩石とともに微細粒子を多量に含み、搬入品とみなされる。

土　　笛　「ワゴ谷」に接したＣ地区から川村安蔵氏が1994年に採集したもので、現在巻郷土資料館に展示されている。採集地は捨場の一部が削平された路頭下に位置する。中期前葉後半段階を中心とする多量の土器が同一地点から採集されていることから〔新潟大学考古学研究部1984〕、これと同時期の製品と考えられる。本例は上端が欠損するがそれ以下が完存し、最大径7.1㎝・現存高7.2㎝を測る。製作法としては、球状をなした粘土塊の内部を１㎝弱の均一な厚さで刳り抜き、上部に粘土を接着するために小孔を穿つ。上端の欠損は、「ソケット」から剥落したものである。全体の形状・サイズは手のひらで保持しやすく作出される。底面には、直立を意図して最大幅1.4㎝の窪みを設けている。器面上半は被熱によって剥落するが、放射状をなした入念な整形痕が下半部に観察できる。側面上部に設けた孔は縦1.6㎝・横2.2㎝。横長の楕円形をなしており、角度を変えながら息を吹き込むと、１オクターブ以上の音色を奏でることができる。石英・チャート・土器片などの破砕粒子や角閃石・雲母・海綿骨針を含み、搬入品と考えられる。

(4)　まとめ

大沢遺跡は、角田山麓縄文時代遺跡群の中で日本海に最も近く、本稿で示した遺物の中には日本海沿岸地域との活発な交流を示す資料がみられる。１の円筒下層ｄ式系土器は、北海道南部から東北北部に中心をもつ。新潟県内では角田山麓の重稲場遺跡群・豊原遺跡〔巻町1994〕などでも類例が出しているが、本例は最も変形度が少ない資料にあたる。本遺跡では、後続の円筒上層ｂ式や２に示す円筒上層ｃ式系土器も出土しており、長期にわたる北方地域との交流を伝える稀な事例となる。角田山麓は日本海沿岸部で長野県産黒曜石が多量に出土する最北の地と位置づけられる〔大工原2002〕。青森県三内丸山遺跡では長野県産石材が黒曜石全体の３％を占めており〔藁科2005〕、その供給に本遺跡居住集団が関与した可能性がある。６の蓮華文施文土器は、北陸の新崎Ⅱ式段階を特徴づけるものである。類似土器は柏崎平野以南の海岸部を中心に分布するが〔寺崎2009〕、角田山麓では本遺跡にのみ高い割合で存在する。大沢遺跡では中期前葉１期の土器にも同様の現象が確認でき、海路によって北陸への往来が行われたことをうかがわせる。近隣の豊原遺跡で出土した黒曜石は、本遺跡から供給された可能性が高い。その中に含まれる隠岐ノ島産石材〔金山ほか1995〕は、北陸集団との接触をつうじ入手したことも考えられる。４は佐渡小木半島の長者ヶ平遺跡でまとまった類例が出土している〔小木町教育委員会1983〕。本遺跡で利用される石器石材の中には、佐渡産とみられる鉄石英・玉髄や黒曜石が存在する。その一方で、前期終末～中期前葉の佐渡には長野県産黒曜石が流通している〔藁科・東村1988〕。当地は越後の中で佐渡との最短地点に位置し、越佐海峡を渡る物流の拠点をなしたことを物語る。特殊な土器や土製品も遺跡の性格に関わる遺物と言える。４は中期前葉としては稀な有文ミニチュア土器である。本遺跡Ａ地区では100㎡たらずの発掘区から30点もの土偶が出土しており、越後平野周辺での多出例の一つとなる〔新潟県立歴史博物館2011〕。土笛は長岡市山下遺跡出土の球状土製品〔中村1966〕と酷似する。信濃川中流域との緊密な社会関係を示す搬入品と考えられる。

（前山精明）

引用・参考文献

上原甲子郎　1956 「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」『弥彦・角田山周辺綜合調査報告書』 新潟県

小木町教育委員会　1983 『長者ヶ平』

金山喜昭・鈴木正男・前山精明　1995 「縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回総会研究発表要旨』 日本考古学協会

大工原豊　2002 「黒曜石の流通をめぐる社会」『縄文社会論（上）』 同成社

寺崎裕助　2009 「新潟県における新崎式系土器」『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会

中村孝三郎　1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市

新潟県立歴史博物館　2011 『にいがたの土偶』

新潟大学考古学研究室　1981 『大沢遺跡　Ｂ´・Ｂ地区の調査概報』

新潟大学考古学研究部 1986 「角田山東麓および佐潟周辺の遺跡調査報告Ⅱ」『ＦＩＥＬＤ NOTE』第４号

巻町教育委員会　1990 『大沢遺跡』

巻町　1994 『巻町史　資料編１　考古』

藁科哲男・東村武信　1988 「佐渡島内遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地同定」『佐渡考古歴史会報』第12号　佐渡考古歴史学会

藁科哲男　2005 「三内丸山遺跡出土の黒曜石製石器・剥片の原材産地分析」『特別史跡三内丸山遺跡年報』８　青森県教育委員会

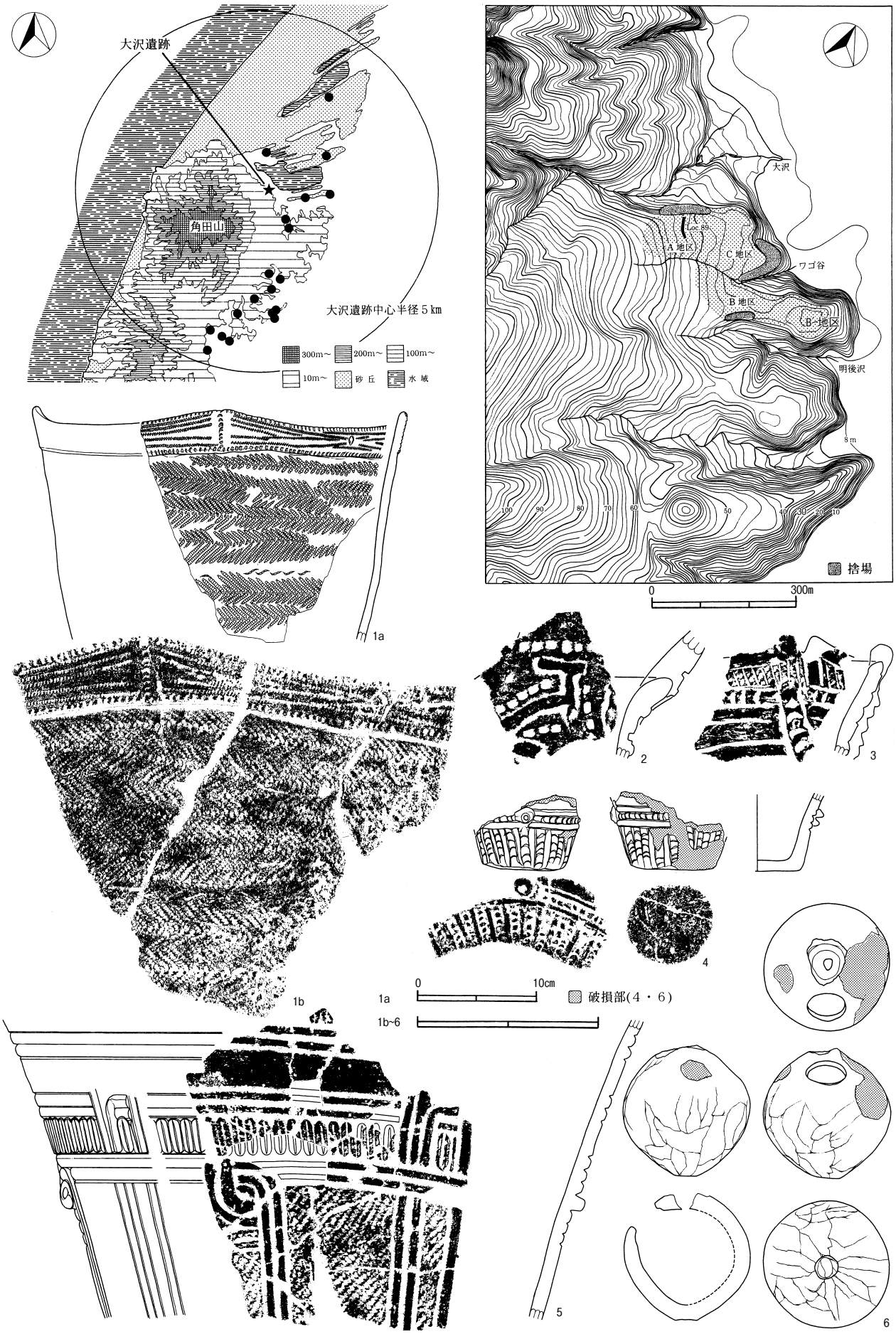

図１　大沢遺跡周辺の地形と縄文時代の遺物（左上のドットは前期終末～中期前葉の遺跡）